

「チンゲンサイの菜の花(3)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

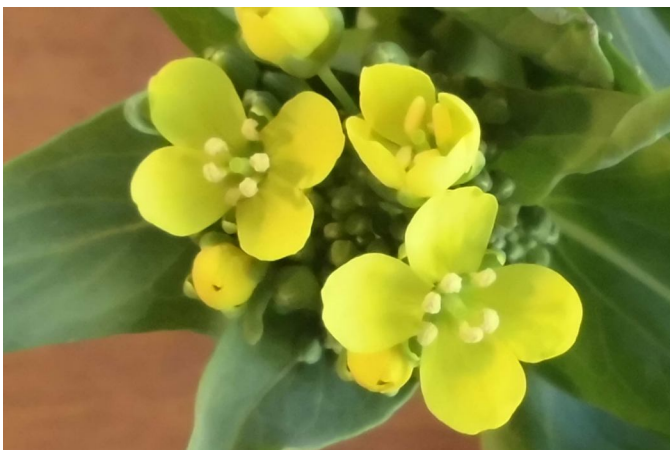
田中 千尋 Chihiro Tanaka

八百屋さんで買ってきたチンゲンサイに、菜の花が咲くとは誰も思わない。「誰も思わない」---ということは、教材性としては「価値がない」ことを意味する。しかし、教師が「これは花が咲くかも知れない」と考えた時点で「教材としての価値がある可能性がある」ことになる。そして実際に咲くと、その価値を確信することになる。



この「菜の花」が持つ「教材としての価値」は、以下のようなものである。

- 1) 八百屋さんで安価で購入できる。
- 2) 花の穂(つぼみ)がほぼ確実に付いている。
- 3) 水を与えるだけで簡単に観察できる。

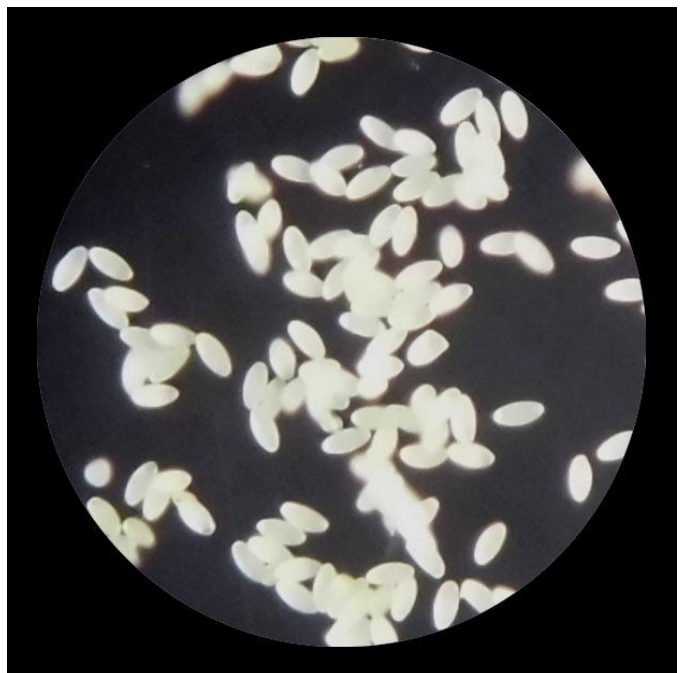


しかし、最も素晴らしいことは、4) 花のすぐそばで、開花する様子をリアルタイムで観察できる---という点だろう。開花前(つぼみ)と開花後の比較では

なく、「開きつつある花」の「一瞬一瞬」を観察することが大切なのだ。



八百屋さんでチンゲンサイを買ってきた翌々日、菜の花は「満開」になった。実は、開花後も継続して観察すると面白い。それはおしべの先端(葯)である。朝、開花直後の葯には花粉はついていない。まだ葯が開いておらず、内部に花粉がある為だ。しかし午後になると、葯の周囲は花粉でいっぱいになる。その花粉が出てくる様子を観察できなかったのは残念だ。



しかし花粉の顕微鏡観察は可能だ。私は黄色い花粉を予想していたのだが、実際の花粉はほぼ白(乳白色)だった。お米にそっくりの形状だが、大きさは長径で0.04mm程度で、スギなどの風媒花よりは大きい、虫媒花としては小さい部類である。チンゲンサイの花は菜の花としては小ぶりである。小さな昆虫に送粉してもらう為に、花粉も小さいのだろうか？